

チラデンチスの装飾十字架

今年7月、ミナス・ジェライス州のチラデンチスへ行った。チラデンチスとは、16世紀に金が発見されたことにより、建設された町で、金鉱採掘時代は、非常に繁栄した。現在では、町の中心街に当時のコロニアル様式の建築がそのまま残されているところから、観光地として栄えている。徒歩で町の中心街を端から端まで歩いて、1時間もかからないよう小さなところに、7つも教会があり、いかにこの町が信仰の厚い地域であったのかが分かる。

さて、私がこの町を散策して気になったのが、装飾された十字架。すべての家の戸口とまではいかないが、たくさんの家の戸口に十字架が掲げていた。その意味は、日本の正月に家の戸口に注連縄を置くのと同じで、家の中に悪霊をいれず、無病息災・家内安全を願ってのことだそうで、毎年5月3日のサンタ・クルス（聖十字架発見の日）祭の前日に、家族が集まって十字架を装飾し、取りつける風習がある。ただし、こちらは、日本の注連縄とは違って、期間が限定されているのではなく1年を通じて飾る。さらに、この十字架には民間伝承があり、同日夜、聖母マリアがこれらの装飾された十字架一つ一つに接吻をして回り、これによって、その家の一員は、神のご加護を得たことになる信じられている。メイナルド・ロシャ・デ・カルヴァリョによると、この習慣は、まったくの口承伝統で、書き留められた文献はないが、おそらくそれは、18世紀からのもので、ブラジルへの導入以来大きな変化はこうむっていないと報告されている。当時、ミナス・ジェライスでは、十字架が、病気、家庭紛争、他人との紛争など、金採掘地方で起こりやすい様々な危険から身を守ってくれると信じられており、そこから、門、家畜の囲い場、鶏小屋、家の戸口、街道端、橋などに十字架が設置されるようになった。また、喧嘩や紛争は、悪霊が引き起こすと信じられていたため、これらを遠ざける方法として、十字架が使用されていた。このような強い十字架への信仰があったこともあって、ミナス・ジェライスではサンタ・クルス祭は、大切な祝祭となっている。

この十字架を装飾する習慣は、ポルトガルにさかのぼると考えられている。オリント・ロドリゲス・ドス・サントス・フィリョによると、この伝統は、おそらくポルトガル国内における14世紀に始まったポルトガルの新キリスト教徒による自己表明の試みに由来するとされている。彼らは、木製の小さな十字架のオーナメントを家の戸口に飾ることによって、その居住者が、忠実な改宗者であることを証明し、また結果的に、それは、教会の異端審問に対する白旗の役割も果たしていた。そして、この装飾習慣が、後に、植民地にも広がったとみなされている。ただし、ブラジルにおいては、キリスト教改宗者であることを証明するためではなく、熱心なカトリック教徒であることを提示するための道具として。

チラデンチスの十字架には、最初に述べた聖母マリアの民間伝承からも分かるように、十字架信仰だけではなく、聖人信仰も加わっている。聖人信仰は、ミナス・ジェライスだけのものではなく、全土に浸透しており、ブラジルの大衆文化を考察する上で重要な鍵である。その中でも特に聖母マリア崇拝は、他のどの聖

人崇拜をも凌駕している。この事実を裏付けるかのように、この伝承にも聖母が登場し、また至上の息子、イエスのシンボルでもある十字架に、崇敬を表して接吻する。これにより、接吻を授かった十字架を持つ家の住人は、神の国から祝福を受けたとみなされることになる。またさらに、高潔なマリアの生き方を見習おうという心がけを、この十字架にたくして、それを家の戸口に飾ることにより、このような心がけを行なおうとしていることを外部に証明する役割も果たしているということだ。

手短ながら、チラデンチスで印象に残った装飾された十字架について、簡単な由来とそれにまつわる伝承、意味、役割を紹介した。

参考文献：

Meynardo Rocha de Carvalho ; "O BEIJO E A SANTA: DEVOÇÃO E SOCIABILIDADE NAS MINAS DO SÉC. XVIII"



木製の十字架にヨーヨーキルト（フシコ）が装飾されている。



木製の十字架にちりめん紙（クレポン）で装飾した十字架。



木製の十字架に絵を描き、布製のハートを装飾。